



音楽に関する実践知研究 -可能性と課題—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 宮崎大学教育学部 公開日: 2018-04-09 キーワード: 作成者: 高見, 仁志, 森, 薫, 大澤, 智恵, 仙北, 瑞帆, 菅, 裕, Takami, Hitoshi, Mori, Kaoru, Ohsawa, Chie, Sempoku, Mizuho メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/6214

音楽に関する実践知研究 —可能性と課題—

高見仁志ⁱ・森 薫ⁱⁱ・大澤智恵ⁱⁱⁱ・仙北瑞帆^{iv}・菅 裕^v

Research on the Practical Knowledge of Music —Perspective and Challenges—

Hitoshi TAKAMI, Kaoru MORI, Chie OHSAWA, Mizuho SEMPOKU,
Hiroshi SUGA

要旨

本研究では、音楽に関する様々な活動を取りあげ、そこに生起する実践知を探究する上で、期待される成果と方法論上の課題を明確にし、それらを横断的に検討することによって、これからの音楽教育研究の可能性を拓けることを目的としている。まず、知に関する先行研究を概観しながら、実践知の構造と特徴を整理した。これを踏まえた上で、音楽に関する実践知研究5事例を示し、(1)実践者の暗黙知の抽出、(2)実践共同体における対話的知の解明、(3)指導・学習場面への応用可能性の検討、の視座から考察を試みた。その結果、「音楽における実践知は、いつ、どのようにして生成・発揮・更新されるか」という問いに対する知見に基づき、新たな実践現場での応用可能性を研究者と応用者が共同で探究することが将来的な課題として示された。

はじめに

1980年代前半、様々な分野の実践的研究に多大な影響を与えたドナルド・ショーン (Donald Schön) は、「行為の中の省察 (reflection in action)」理論を発表した。彼はジャズ・ミュージシャンの例をあげながら、行為と思考に関して次のように説明した。

集団で作りに上げている音楽に対して、個人が寄与できる音楽について行為の中で省察している。そして自分が今していることをその過程で考え、自分のやり方を変化させていく。(Schön 1983, 佐藤・秋田訳 2001, pp. 90-91)

i 佛教大学教育学部教授
ii 東京未来大学こども心理学部講師
iii 京都市立芸術大学音楽学部研究員
iv 広島大学大学院教育学研究科大学院生
v 宮崎大学教育学研究科教授

この言葉からも理解できるように、ある状況における実践者の行為は同時に思考をとまなう。この行為と思考は不可分な関係にあり、実践者本人さえも気づかないうちに生起するといった暗黙性をも具備している。このような「個別具体的な状況で発揮され、更新される実践者独自の知識や思考様式、方略の総体」を「実践知 (practical knowledge)」として定義し¹⁾ 本研究の中核に位置づけた。

近年、このような実践知に関する諸研究は、認知科学の発展にもなあって大きな成果をあげてきた。専門職の熟達化、学習の構造、あるいは企業のタクティクスに及ぶまで、その対象は多岐にわたっている。

音楽教育研究分野に目を転じれば、例えば情動、知覚感受、発達等、認知科学を基盤とした先行研究を散見することはできる。しかしながらそれらは、実践知の概念、すなわち状況に埋め込まれ暗黙的で更新され続ける不可分な行為と思考の存在を、実証することが企図されたものとはなっていない。

そこで本研究では、他分野では成果をあげている実践知研究を音楽教育分野に導入することを試みる。音楽に関する様々な活動を取りあげ、そこに生起する実践知を探究する上で、期待される成果と方法論上の課題（質的・量的の両者）を明確にし、それらを横断的に検討することによって、これからの音楽教育研究の可能性を拡げることを目的としている。

本研究の構成としては、まず知に関する先行研究を概観しながら実践知の構造と特徴を整理する。次に音楽に関する実践知研究5事例を提示する。さらには、5事例から導出された成果と課題を横断的に検討し、総合的な考察を試みることで総括とする。

1. 実践知の構造と特徴

実践知を考える上で、まず実践とは何か、知とは何かを踏まえる必要がある。本章ではこれについて整理し、実践知の構造と特徴について述べる。

1.1 実践とは何か

実践という場合には、自覚的な決断と反省的思考をそなえた営みを示す場合が多いが、それでは実践のすべてを説明しきれない。ルーティン化され、時になかば無意図的になされる行為も我々の実践の営みの要素であり、またそれらはすべて社会的に構成される。よって昨今の文化人類学や認知科学の分野においては実践を、社会・文化・歴史的な網目の中に位置づいた行為であり、慣習や個別の状況と結びついたものとして論じている（田辺 2003, 茂呂 2012他）。本研究が志向するのもこうした実践であり、それゆえ実践の多様性をどのように捉え、扱うのがまず大きな問題となってくる。

1.2 知とは何か

それでは、そうした実践にかかわる「知」とは何か。この問題はより複雑である。というのも実践知の「知」は、knowledgeの訳語「知識」、intelligenceの訳語「知能」、さらにそれらすべてを包括して指す場合が併存しているのである。

最も古典的な定義において知識とは「正当化された真なる信念」であり、この定義のもとで知識は、静的・普遍的で、言語や数式などの記号の形で表現されるもの、身体をとまなう実践や行為とは切り離されたものであった（戸田山 2002）。しかし認識論の発展とともに、知識の正当化というアイデア自体に疑義が呈される。知識は誤りうること、我々は既存の知識を実践

の中で道具的に用いて適宜修正・更新していることに注目がなされるようになった。さらに個々の知識を用いて共同体の成員が相互作用しながら探究していく過程そのものを知識として捉える視点が生まれた。プラグマティズム的な知識観の登場である（谷口 1991, 伊藤 2016）。実践知研究はこの延長線上にあるものと位置づけられる。

20世紀以降は、それまで知識に含まれてこなかった非言語的な技能や思考、方略を知識の範疇に入れて検討する所論が提出される（Ryle 1949, Polanyi 1963 他）。さらに90年代に入ると組織において成員が相互作用しながらつくり出す明示的な知識と暗黙的な知識、それらの連関・変換の過程を捉えるためのモデルが案出される（野中 他 1996）など、実践にかかわる多様な知識をいかに対象化・同定するかは、認知科学のみならず認識論においても今なお論争的な課題の一つとなっている。

また、「知能 (intelligence)」の概念を用いて、我々の知的な営みの動的な様態を捉えようとする所論も登場している。ガードナー (Howard Gardner) は知能を「情報を処理する (中略) 潜在能力で、ある文化で価値のある問題を解決したり成果を想像したりするような、文化的場面で活性化されうるもの」と定義し、「多重知能の理論」を提示した (Gardner 2000)。特定の文化・特定の場面で表出する能力を統合的に捉えようとするこうした知能研究も、実践知研究の手がかりとなるものである。

1.3 実践知の構造

本研究における実践知の定義は前述（「はじめに」参照）の通りである。また、その特徴としては、以下の4点があげられる²⁾。

- ①個人の実践経験によって獲得されること
- ②実践において目標指向的であること
- ③実践の手順や手続きにかかわること
- ④実践場面で役立つこと

このような特徴をそなえる実践知の大部分を暗黙知 (tacit knowledge) が占めるとされ、その構造を森 (2013, p. 45) は図1のように示している。

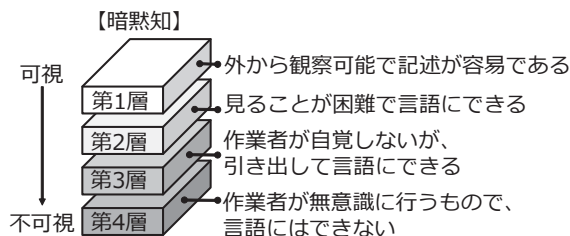


図1 暗黙知の4階層（筆者改変）

図1からも理解できるように、実践知解明の最大の課題は、不可視的で意識化、言語化が難しい暗黙知をどのように同定・測定・描写・抽出するかという点にあるといっても過言ではなからう。そこに方法論上の困難が山積しているであろうことは想像に難くない。また、そうし

た困難との格闘に腐心するあまり、研究目的に対する意識が希薄化することも危惧される。このような事態を回避するためにも次章の五つの報告では、第一に各々の研究目的と期待される成果を明示し、順次、方法・内容・方法論上の課題、の項目に整理して提示する。

2. 音楽に関する実践知研究 5 事例

2.1 音楽科授業における教師の実践知研究

1) 背景と目的、および期待される成果

近年、教育現場の多忙化と同僚性 (collegiality) の希薄化により、熟練教師や指導教員といったメンター (mentor) による新人教師への助言の機会が減少している (文部科学省 2006)。音楽科においてもそのような傾向は顕著に見られ、「音楽科は授業展開についてアドバイスできる教師が少ない教科である。できなくてもいいような雰囲気もある (筆者要約)」といった新人教師の報告が確認できるほどである (高見 2014, p. 137)。こうした問題は看過できないまでに深刻化しており、新人教師の成長を支援する施策の検討が焦眉の課題となっている。

そこで、音楽科における新人教師教育プログラム開発に着手し、彼らの職能発達支援を目指す研究を立ち上げることとした。その端緒として、本節ではプログラム開発に向けた指針を、音楽科授業観察時における熟練教師の実践知解明の観点から提示する。この取り組みが、音楽科における新人教師教育の機会と質を保障し、彼らの確かな成長に結実することを期待している。

2) 方法

以下の手続きによる。

- ①新人教師の行う小学校音楽科授業を、リアルタイムに同室内で複数の熟練教師が観察し、授業進行にともなって思考していることを小声で発話する「オン・ゴーイング法 (on-going method: 生田1998)」を採用する。録音した発話記録を文字に起こし、それを手がかりに、熟練教師それぞれの着目した共通事象と異事象、共通内容と異内容の観点から分析を進める。最終的にはトライアングレーションのアプローチにより、優秀なメンターが稼働させる職能発達支援を指向した実践知の解明を試みる。
- ②上記授業中の新人教師の実践知を、「再生刺激法 (stimulated recall method)」により解明する。上記①において得られた熟練教師の実践知と、授業者である新人教師のそれとを比較し、両者に大きくズレが生じる事象および認知の差異に関して検討する。
- ③上記②を基盤として、優れた音楽科授業の創造を見据えた新人教師教育プログラムを開発し、職能発達支援への応用を試みる。

3) オン・ゴーイング法の可能性

現在、新人教師の職能発達支援を企図する授業研究会では、事後検討スタイルをとることが多い。そのような場でメンターらが新人教師に与える助言は、授業観察中の気づきを基盤としてはいるものの、すでに事後の知見と化した内容 (reflection after actionまたは、reflection on action) で構成される。換言すれば、その状況下でしか具現化し得ない実践知に依拠したアドバイスは俎上に載せられてはいない、という点が指摘できるのである。

このことは、音楽科授業研究会に大きな見直しを迫っているといえよう。すなわち、瞬間的にその場で生起する「音楽に対する“感じ”」(Schön 1983, 佐藤・秋田訳 2001, p. 90)といった直感が鍵を握る音楽科にこそ、状況に埋め込まれた認知に基づく授業研究が希求されるのである。この視点に立つとき、オン・ゴーイング法の可能性が浮かびあがる。

4) 方法論上の課題

本調査の課題として第一に指摘できるのは、違う思考抽出法(オン・ゴーイング法と再生刺激法)によって得られたデータの比較を行う点である。ただし、授業者にオン・ゴーイング法を用いることは現実的ではないと考えられ、現在のところ最も有力とされる再生刺激法を採用することとしている。

第二の課題として、前述した暗黙知の第3～4層の抽出があげられる。インフォーマントへのインタビューにおいて、仮説を立てる技量、体験に基づく洞察力等、音楽科授業の文脈に即し状況と対話(conversation with the situation)しながら分析する能力が、実践者だけでなく調査者にも求められている。このように、実践者と研究者が協働して抽出・同定・描写に向かって試行錯誤を繰り返すことが、実践知研究を貫く重要な課題となる。

2.2 定量的研究による演奏技能へのアプローチ

1) 背景と目的、および期待される成果

楽器演奏の基礎技能は、実践知の最小単位の一つといえる。熟達者ほどそれらが自動化され(高橋 2007)、意識下の制御が不要となっていることが多く、さらに技能の特質上、身体感覚に埋め込まれ言語化し難い部分も多いと考えられる。学習者の技能習得を支える指導者が同時にその領域の熟達者である場合、熟達者であるがゆえに、それらを意識化したり、適切に言語化したりすることがむしろ難しいことがありうる。また、学習者が自律的に実践知を身につけようとする場合、その具体的な内容や構成を知ることは、暗中模索中の偶然によってではなく、習得が必然となるような効果的な訓練を実現するための具体的なゴールをもつという意味で重要だろう。暗黙知を多分に含む実践知の解明において、よく検討された課題や条件の設定により統制された実験による定量的研究は、実践知保持者の意識や言語を介さず行動の中に現れる様々な指標をもとに客観的に測ることが可能なため、強力な、あるいは必要な手だての一つとなるはずだ。本節では、実践知に関する定量的研究の可能性と課題を、鍵盤楽器演奏に関する実験研究の例とともに述べる。

2) 方法

鍵盤は、位置に応じて配置されたキーと音高が一对一で結びついた楽器の「操作盤」である。演奏にはキーの位置群に関する実践知が必要である。キー位置の情報源として次の二つ、

- 予め蓄えられたキー位置の記憶
- 演奏中リアルタイムに知覚される情報

が考えられるが、このうち前者について検討した実験研究を紹介する。

この実験(Ohsawa *et al.* 2013)は、ピアノ演奏者のもつキー位置記憶の正確性を検討している。課題は、鍵盤面に見立てた実験用テーブル上で、ターゲットとするキーの位置を示指で指示するものであった。テーブル上に参照キー1本の位置を示すシートを置き、その他一切の位置手がかりを排除した。あえて日常の演奏動作と異なる動作を課題とすることで、体性感覚由

来の情報の利用も制限された。

3) 結果

実験の結果、熟達者・非熟達者とも指示された点は白鍵の幅を大きく超えており、熟達者においても、あらゆる手がかりから独立した「位置記憶」はそれだけを頼りに演奏できるほど正確なものではないことが明らかとなった。しかし、熟達者と非熟達者の指示位置正確性の差からは、キー位置記憶は曖昧ながらも獲得されていることも同時に判明した。記憶の役割については今後も検討が必要である。

4) 方法論上の課題

上記の例では、ピアノ演奏者のもつ演奏の基礎技能の実践知について、行動の数理的データをもとにした発見や示唆が得られた。

実践知を小さな要素に分解して検討するために考案した実験課題と実験条件により得ることができた知見は、直観的に納得されにくい面ももつ。また個々の要素は単体ではなく様々な情報との関係性の中で機能するため、ミクロな要素に分解して検討することはしばしば批判にさらされ、それに対する答えを用意する必要もある。こうした限界や課題に対処しながらも定量的研究の強みを生かして研究を推し進めるためには、実験室的に統制された実験と、より直観的に受け入れやすい実験または調査を併せて行い、様々な立場の人が研究成果の妥当性を納得できる構成で情報を発信していくことが必要だろう。

定量的研究の宿命として、実験をするために必要な時間的・経済的コストに対し、一つの実験で証明できる事柄が一点もしくはごく限られた数に限られるという面もある。一方で、それが妥当でない可能性を排除し、証明することができる点は強みでもある。定量的研究を行うにあたっては、解明しようとする実践知に関するさまざまな要素の中で、特に重要で基礎的と思われるものを見極め、段取り良く見通しをもって、発見を重ねていく必要がある。

2.3 生涯学習者としての邦楽家

1) 背景と目的、および期待される成果

昨今、専門家（専門職）の成長が注目されている（竹内 2013, 朝倉・清水 2014）。自己を成長させ続けることは、すなわち実践における知識と技術の継続的獲得であり、この獲得過程は生涯学習として捉えられる。高い実践力を保有する専門家が、どのように実践における知を培ってきたか、また培っているかという生涯学習の過程を解明することは、その道を学ぶ実践者にとって示唆に富むものである。

音楽の分野における専門家の視点から見たとき、特に邦楽家の生涯学習に着目して実践知獲得過程を明らかにした研究は、見受けられない。多様な音楽に溢れ、人々の生活や嗜好が変化する現代社会において、邦楽家の演奏や指導の実践は、その変化に応じながら継続されていることが考えられる。そこで本調査は、生涯学習者としての邦楽家に焦点を当て、邦楽家の指導及び演奏活動における実践知の形成過程を明らかにする。本調査により、伝統音楽の指導において邦楽家が最も重視していることが何かを明らかにできる。これにより、学校教育における伝統音楽の教材化への示唆を得られる。

2) 方法

本調査では、実践知の形成「過程」に着目するため、ライフヒストリーを作成することで長期的な視点から実践知形成の変容を分析した。

調査対象者である山田流箏曲演奏家A氏の人生についての語りを半構造化インタビューによ

り引き出し、逐語化したデータを時系列で並べ変えることでライフヒストリーを作成した。さらに複数の楽器経験の中から、特に箏の指導や学習にかかわるデータを抽出し、SCAT分析によりA氏の実践とそれに関連する指導観・学習観・音楽観について分析した。

3) 結果

分析の結果、A氏の伝統音楽の指導では、いかに美しく演奏するかという演奏技術などを核とした美的追求の指導から、伝統文化の価値意識に基づく人間教育を核とした指導への指導観及び実践の変容が見られた。この変容は、A氏の伝統文化に対する価値意識の形成が要因である。現在A氏が考える伝統文化の価値は、音色や演奏技術、所作、稽古が内包している忍耐強さ・心遣い・礼儀など伝統的精神性の伝達である。この伝統的精神性は、人となりを整える人間教育的役割を担っており、この精神性を教え伝えることが伝統音楽の指導的意義であるとして実践を行っている。

A氏が考える伝統音楽の指導的価値は、音楽そのものがもつ美的価値に囚われない文化・社会的価値を含むものである。矢向は、「芸術の価値とは、あくまで文化や社会に依拠するものであり、それ自体では無根拠である」(矢向 2005, p. 88) という。また、Elliott (2015) も美的価値を教えることが音楽教育の本質ではなく、音楽の背景にある文化や社会を含めた多次元の音楽価値から教育する必要性を唱えている。以上は、上記のA氏の見解に近いものである。

これら伝統文化の価値意識に基づく指導観とそれにとまなう実践の変容は、実践知の源泉としての信念が作用している。A氏は、伝統音楽を通じた人間教育が邦楽家である自身の使命であるとして、強い目的の中実践を重ねている。これは、様々な経験を通して蓄積された実践知が信念としての指導観を形成しているといえる。菅 (2000) は、確立された信念が個々の指導場面で実践的な判断を下す際の基準となることを明らかにしている。このように実践において発揮される知は、指導者がもつ信念が支えとなっている。

4) 方法論上の課題

本調査では、今後、複数のライフヒストリーを比較することで、実践知形成について普遍的要素を明らかにすることを想定している。ライフヒストリーの特質である対象者の固有性・独自性を担保しながら、一方で普遍的要素を取り出すことで、学校教育における伝統音楽の指導へ還元できる要素を見つけ出す方法論を確立することが重要な課題である。

2.4 子ども達の音楽学習における知識の共同的生成—言語的な音楽の知識に焦点をあてた検討—

1) 背景と目的、および期待される成果

音楽を人々の行為と捉える視点に立った音楽教育学分野の先行研究において、「言語的な音楽の知識 (verbal musical knowledge)」は、音楽実践の中で挿入句的に用いられるものとして論じられてきた。例えばElliott (1995) は、音楽的概念 (musical concepts) のようないわば教科書型の音楽の知識が学習の中心に据えられてきたことを批判し、音楽実践における理解を支えているのは、主として非言語的で状況依存的な思考や知であることを強調している。彼のこの論述は、実践知の多くを暗黙知が占めているという森 (2013) の論と志向を共有するものである。

しかし一方で言語的な音楽の知識は、単なる挿入句と片付けられない特有の機能を持つ。我々は音楽実践の中で、言語的な音楽の知識を参照し、自らの思考や知の輪郭をはっきりさせていく。またそのとき従事している音楽活動をよりよくするためのリソースとして、言語的な音楽の知識を用いている。また本稿の冒頭で述べた実践知の諸相を踏まえると、共同体内の成

員がどのように相互作用をし、新たな知識を生成していくのか、そのプロセスを明らかにすることの必要性は大きい。その解明のカギとして、明示的で対象化の可能な言語的な知識に着目し、それが成員によってどのようにやりとりされるのかを詳らかにすることには一定の意義があろう。

本調査は、音楽実践の中でも小学校での音楽学習における、相互作用や知識の共同的な生成のプロセスを、言語的な音楽の知識の表出とその変容に焦点をあてながら明らかにすることを目的とする。この目的の達成を通じて、音楽にかかわる実践知における知識の共同的生成の側面の解明に資することを、期待できる成果として考えている。

2) 方法

本調査ではマイクロ・エスノグラフィーの手法を用いた。対象としたのはA県A郡Q小学校の3年1組29名の子ども達と、音楽専科教諭1名によって行われた音楽科の授業である。調査期間は2015年4月～2016年3月、頻度は週に1度であった。ビデオカメラを用いて授業を観察し、子ども達と教諭の発話と行為をテキスト・データに起こした後、言語的な音楽の知識を含むやりとりを抽出・分析した。

3) 結果

調査を通じて以下のことが明らかになった。

- ① 子ども達の発話は、直観的な形容や比喩表現を中心としており、そこには他の成員の発話と類似しているが少し異なる発話をするという「異口同音」の暗黙的ルールが存在する。(例：「お葬式の曲」「悲しい」「おばけやしき」)
- ② 直観的な形容や比喩表現による発話を重ねる中で、音楽的概念の名辞が発話に含まれるようになる。ただし子ども達は意味を理解して使用しているのではなく、いわばアタリをつける形で用いる。(例：「先生フラット使ったでしょ?」)
- ③ 音楽的概念の名辞を発話することが、探り弾き等の非言語的な行為を牽引する。子ども達は行為と発話のやりとりを通じて、その共同体に特有の言語的な音楽の知識(例：「シのフラットは死ぬみたいな感じになる音」)を生成する。

子ども達の音楽学習においては、直観やメタファーによる発話が契機となって共同的な探究が始まり、徐々に音楽的概念の名辞が、意味を理解していないままに用いられ、それをめぐる検証が行われていく。共同的な検証を通じて、その子ども達の中で認められた、その実践に特有の言語的な音楽の知識が生成される。

4) 方法論上の課題

子ども達が生成したその共同体に特有の言語的な音楽の知識がいかにして再修正され、より一般化・抽象化されていくのか、もしくはされないのかについて、長期の観察を通じた検討が必要である。また言語的な音楽の知識を生成する相互作用のプロセスには、参加する・できる子どもと参加しない・できない子どもがいる。これは既存の種々の知識にアクセスできるか否かの問題とかかわっている。状況的学習論の視点からの検討・考察を行う必要がある。最後に、発話による言語的な知識の表出と併せてなされる、非言語的な行為の意味や機能を検討していくことで、音楽学習にかかわる実践知の全体像を明らかにしていくことも課題としてあげられる。

2.5 創発の場としての音楽指導

1) 背景と目的, および期待される成果

演奏表現は、演奏の質を決定する最も重要な要素であると一般的にみなされているにもかかわらず、その指導方法についての研究は少ない (Lindström *et al.* 2003)。本調査が目指しているのは、暗黙知を含む音楽表現の指導に関する実践知の抽出と理論化である。

先行研究において演奏指導者は、明確に定義された問題状況に対して最適な手段を選択して解決する技術的熟達者とみなされてきた。これに対し、様々な分野における不確実・不安定・文脈依存的な場面において状況と対話しながら意思決定を行う実践的熟達者としての専門家の思考過程が注目されつつある (Schön 1983, 金井・楠見 2012)。また Sawyer (2011) は、従来の台本化された (scripted) 教授観に対し、教授行為を即興的な活動として捉え直す即興的教授観 (teaching as improvisation) を提唱している。

演奏表現指導の熟達化を特徴づける要因を実践知の視点から明らかにすることにより、音楽科教員養成課程において学生に身に付けさせるべき資質・能力を明確にし、それに基づく演奏指導力開発プログラムの開発に大きな示唆を与えると期待できる。

2) 方法

本調査では3人の熟練器楽指導者に高音部・中音部・低音部の三つの声部からなる電子ピアノ三重奏の演奏表現指導をさせた後、自身の演奏指導を振り返らせ、指導の意図やその効果、最終的な演奏の評価等についてインタビュー調査を行った。またこれとは別に、指導を受けた演奏者にも、指導の印象や指導中の各場面での思考内容についてインタビューを行った。これらの内容をテキストに起こし、意味内容による切片化の後、グラウンデッドセオリーの手続きによってボトムアップにカテゴリー化した。

3) 結果

3人の熟練器楽指導者の指導に共通する特徴として、次の3点が明らかとなった。

- ① 指導者は明確な目標演奏イメージを事前に用意していない
- ② 指導者を含む演奏者全員の協働によって方針が決定されている
- ③ 指導者は足場かけ (scaffolding) 的支援を行っている

明確な目標に向かって指導者が単独で価値創造を行うのではなく (図2)、指導者と演奏者相互の創発性 (emer-

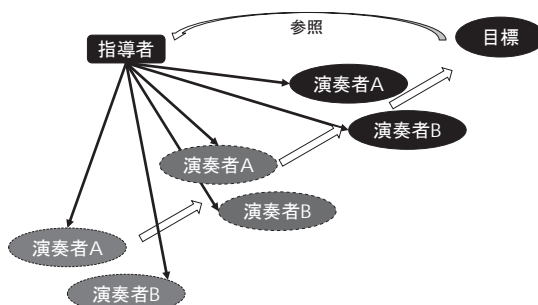


図2 指導者が単独で価値創造を行うプロセス

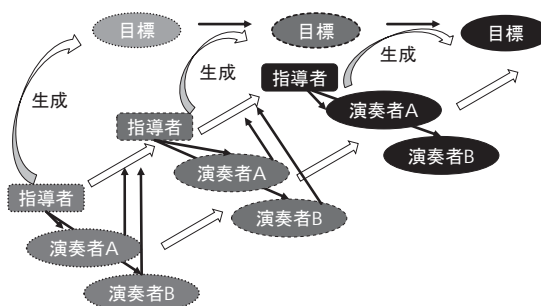


図3 集団的価値創造のプロセス

gence) に特徴づけられる集団的創造のプロセスであると考えることができる (図3)。

4) 方法論上の課題

演奏指導者として熟達には、優れた即興表現者と同様、臨機応変に音楽的あるいは教育的な問題に対処する教授学的創造性 (pedagogical creativity) が不可欠となると考えられる。したがって指導中の演奏評価や演奏者との対話を通じて展開されている指導者の即時的意思決定プロセスをより詳細に明らかにすることが必要となる。そのためには演奏指導を事後的に振り返って陳述させることによって得られるインタビューデータだけでは限界がある。また演奏者全員の創造プロセスに与える指導者の指導の影響について検討するためには、指導を受けている演奏者側の即時的意思決定プロセスについてもより詳細なデータ収集が必要となる。VTR再生刺激法により指導者と演奏者それぞれにセッション中の思考過程をシンクアラウドさせるなどの方法について検討する必要がある。さらに本調査の成果を大学における演奏指導力養成カリキュラムに応用していくことも今後の課題となる。

3. 考察：今後の研究課題

音楽の演奏や指導、学習にかかわる五つの研究事例を提示し、その成果と課題について検討してきた。これらを総合すると音楽に関する実践知研究の視座を、大きく次の3点に整理することができる。

- ① 実践者の暗黙知の抽出
- ② 実践共同体における対話的知の解明
- ③ 指導・学習場面への応用可能性の検討

この3点について、実践者と研究者、実践者と実践共同体、研究者と応用者の3組の相互作用という視点から捉え直し、今後の課題について考察する。

また、事例 (2.1)「音楽科授業における教師の実践知研究」、事例 (2.2)「定量的研究による演奏技能へのアプローチ」、事例 (2.3)「生涯学習者としての邦楽家」では、前掲した図1の第3、第4階層の知に対する異なる視角からの探求が企図されている。語り手である実践者が自らの経験について十全に理解しており、常に言語化できるとは限らない。これを乗り越える一つの方法は、実践者の言語化に頼らず、何らかの観察可能な対象を選択し、定量的なデータを蓄積することである。このときに課題となるのは、状況依存的に展開されている「わざ」としての実践知を説明する上で、統制された環境下における限定的観察データが妥当性を持つものであることの根拠を提示することである。

また大倉ら (2016, p. 11) は、質的研究における語り手と聞き手の関係について「ある出来事に対する当事者であると同時に他者となるとき、語り手と聞き手が共に立つ共通の地平が生まれ、そこに第3の領域、対話空間が生まれる」と述べている。暗黙知は、まさに暗黙であるがゆえに、聞き手である研究者だけではなく語り手である実践者にとっても他者の領域である。したがって聞き手である研究者の立場を、外側から実践者の思考を探求する者ではなく、実践者との相互作用を通じて実践知の理解を深めていく知の共同生成者として研究の中に明確に位置づけていくことが課題となる。

次に、事例 (2.4)「子ども達の音楽学習における知識の共同的生成」および事例 (2.5)「創発の場としての音楽指導」では、音楽の学習・指導場面において生成され展開される知の対話性に注目している。対話的共同行為の中では一人の学習者や指導者の発話の意味は、「語りかけ」として常に開かれており、それを引き受ける他の学習者や演奏者の反応によって「不意打ち的」に補完される (中田 1997)。したがって実践知は、個々の学習者や指導者の内部に存在するのではなく、対話の相互作用として成立し、そのつど更新される。この知の相互補完性、あるいは相互依拠性を詳細に記述することが一つの課題となる。

最後に、すべての研究事例は、研究成果を音楽の学習・指導・教授場面へ応用することを目指している。定性的な研究の中で対象となっている実践知は状況依存的であり、一回性や場面固有性から逃れることはできない。また定量的な研究によって得られた知見を「わざ」の実践現場に応用する際にも、やはり実践知の状況依存性が問題となる。したがって個々の実践者内部で実践知がどのように構造化され、蓄積されているかを記述するだけでは、応用可能性は著しく限定される。各実践現場において知がどのように作用しているか、そのダイナミックな様相を明らかにする必要がある。いい換えると「音楽における実践知とは何か」という問いではなく、「音楽における実践知は、いつ、どのようにして生成・発揮・更新されるか」という問いに対する知見に基づき、新たな実践現場での応用可能性を研究者と応用者が共同で探究することが将来的な課題となる。

おわりに

本研究では、実践知、暗黙知というキーワードを用いて、音楽に関する様々な活動に生起する知を横断的に検討してきた。音楽教育研究に対して新たな視点を導入した点において、独自性や意義が認められるものと考えている。しかしながら一方で、前述の通り課題が山積していることも事実である。

それらの課題は二つのカテゴリーに類別できるであろう。すなわち、第2章に示した個人研究レベルにおける課題と、第3章に示した共同研究としてのそれである。とりわけ後者の課題は、研究対象が多岐にわたるがゆえに生じる複雑性を内包している。

このように多くの課題が指摘できるのも、本研究が緒に就いたばかりであるからに他ならない。今後は、それらを克服し、新たな稿を発表したいと考えている。

注

- 1) 砂上ら (2015, pp. 8-9) の理論を援用した。
- 2) 楠見 (2012, pp. 11-12) の理論を援用した。

引用・参考文献

- Elliott, David J., (1995). *Music Matters: a Philosophy of Music Education*. New York: Oxford Univ. Press.
Elliott, David J., Silverman, Marissa. (2015). *Music Matters: A Philosophy of Music Education*. New York: Oxford Univ. Press.

- Gardner, Howard. (2000). *Intelligence Reframed: Multiple Intelligences for the 21st Century*. New York: Basic Books.
- Lindström, E., Juslin, P. N., Bresin, R. & Williamon, A. (2003). ““Expressivity Comes From Within Your Soul”: A Questionnaire Study of Music Students’ Perspectives on Expressivity.” *Research Studies in Music Education*, 20, no. 1, pp. 23-47.
- Ohsawa, C., Obata, S., Hirano, T., Tszuzaki, M, Ito, T., Saito, T. & Kinoshita, H. (2013). “Memory of the Piano Key Positions in Pianists.” In *Proc. of the International Symp. on Performance Science 2013*. ed. Williamon, A. & Goebel, W. Brussels: AEC: pp. 67-72.
- Polanyi, Michael (2009). *The Tacit Dimension Revised ed. Edition*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Ryle, Gilbert (2000). *The Concept of Mind 1st Edition*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Sawyer, R. Keith (2011). “What Makes Good Teacher Great? The Artful Balance of Structure and Improvisation.” In *Structure and Improvisation in Creative Teaching*. ed. Sawyer R.K. New York: Cambridge Univ. Press: pp. 1-24.
- 朝倉雅史・清水紀宏 (2014) 「体育教師の信念が経験と成長に及ぼす影響：「教師イメージ」と仕事の信念」の構造と機能』『体育学研究』59, 21号, pp. 29-51.
- 生田孝至 (1998) 「授業を展開する力」浅田匡・生田孝至・藤岡完治 編『成長する教師 教師学への誘い』金子書房.
- 伊藤邦武 (2016) 『プラグマティズム入門』ちくま新書.
- 大倉得史・荘島幸子・鷹田佳典 (2016) 「質的研究としての〈あいだ〉：生の記述と把握を目指して」『質的心理学フォーラム』8, pp. 5-13.
- 楠見孝 (2012) 「実践知と熟達者とは」金井壽宏・楠見孝 編『実践知：エキスパートの知性』有斐閣.
- Schön, Donald (1983), 佐藤学・秋田喜代美 訳 (2001) 『専門家の知恵：反省的实践家は行為しながら考える—The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action』ゆみる出版.
- 菅裕 (2000) 「音楽教師の信念に関する研究」『日本教科教育学会誌』22, 4号, pp. 65-74.
- 砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・中坪史典・安見克夫 (2015) 「幼稚園4歳児クラスの片付けにおける保育者の実践知—一時期の異なる映像記録に対する保育者の語りの分析—」『日本家政学会誌』66, 1号, pp. 8-18.
- 高橋範行 (2007) 「ピアノ演奏における熟達：演奏解釈と聴覚フィードバック利用に関して」京都市立芸術大学博士論文.
- 高見仁志 (2014) 『音楽科における教師の力量形成』ミネルヴァ書房.
- 竹内一真 (2013) 「専門家による教えることを通じた熟達化とキャリア形成：実践を通じた教育における教え手の成長と技能獲得の関係に関して」『Journal of Quality Education』5, pp. 71-85.
- 田辺繁治 (2003) 『生き方の人類学：実践とは何か』講談社現代新書.
- 谷口忠顕 (1991) 『デューイの知識論』九州大学出版会.
- 戸田山和久 (2002) 『知識の哲学』産業図書.
- 中田基昭 (1997) 『現象学から授業の世界へ』東京大学出版会.
- 野中郁次郎・竹内弘高 (1996) 『知的創造企業』東洋経済新聞社.
- 森和夫 (2013) 「暗黙知の継承をどう進めるか」『特技懇』268, 特許庁技術懇話会.
- 茂呂雄二 (2012) 『状況と活動の心理学：コンセプト・方法・実践』新曜社.
- 文部科学省 (2006) 『今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申) (案)』中央教育審議会.
- 矢向正人 (2005) 『音楽と美の言語ゲーム：ヴィトゲンシュタインから音楽の一般理論へ』勁草書房.